様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 ２７ 日現在

機関番号：３２６４４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ０２７９６

研究課題名（和文）学習者コーパスに基づいたCEFR準拠評価ルーブリックとCan-Doリストの開発

研究課題名（英文）Development of CEFR-informed Assessment Rubrics and Can-Do Descriptors based on a Learner Corpus

研究代表者
長沼　君主（Naganuma, Naoyuki）

東海大学・国際教育センター・教授

研究者番号：２０３６５８３６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、ライティング及びスピーキング学習者コーパスを構築し、学習者の実際のパフォーマンスの基準特性に基づいたヨーロッパ言語共通参照枠（CEFR）に準拠した産出能力評価のためのルーブリックの開発検討を行った。本科研による学習者コーパス構築で、パフォーマンス評価に基づいたカリキュラム目標におけるCan-Doリストの記述の見直しを行い、よりCEFRに準拠したカリキュラム改善・開発のための基盤を得ることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
次期学習指導要領においてCEFRが参照され、CEFRに基づいたカリキュラム開発が広まる中、カリキュラム目標と評価ルーブリックを実際のCEFRレベルに基づくパフォーマンス評価とその学習者コーパスデータと結び付けた研究は、一つの事例として意義あるものと考えられる。今後こうした知見に基づき、学習者ポートフォリオとコーパスが連動し、エビデンスに基づいたカリキュラム開発と評価が促進されることが期待される。

研究成果の概要（英文）：In this study, a written and spoken learner corpus was constructed, and the writing and speaking assessment rubrics against the CEFR were validated through evidence provided by the learner corpus. The learner corpus was further used for the revision of the can-do descriptors in the CEFR-informed curriculum goals, and the improvement towards the more CEFR-oriented curriculum.

研究分野：言語テスト論

キーワード：学習者コーパス　CEFR評価　Can-Do自己評価　言語ポートフォリオ

１．研究開始当初の背景

近年、国内におけるグローバル化に向けた教育改革の流れが加速する中、2013 年 12 月には「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」が公表され、国際的認知の高まる「ヨーロッパ言語共通参照枠（Common European Framework of Reference for Languages、CEFR）」を参照し、外部試験などの点数による数値目標だけでなく、「英語で何ができるか」を行動ベースで記述した Can-Do リストを活用し、小中高を通じて一貫した学習到達目標を設定することが計画の一部として掲げられた。具体的な支援として、すでに「各中・高等学校の外国語教育における「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標設定のための手引き」が 2013 年 3 月に公開されており、各都道府県の教育委員会を介して拠点校が中学・高校に形成されるなど、着実に改革が広まりつつある。

こうした Can-Do リストの能力記述文（descriptors）による到達目標の設定は、学習指導要領の内容記述をもとにした共通のリストが、トップダウンにより先に規範的に（prescriptive）規定されるのではなく、各学校の状況やニーズに合わせ、目の前の学習者ができることを踏まえて、記述的に（descriptive）設定をすることが奨励されている。また、Can-Do リストで設定された到達目標が現実に達成されているかを確認し、「できる感（自己効力）」を感じさせる場面を作るためにも、Can-Do リストと対応したパフォーマンス評価の導入が求められている。

日本では能力記述や到達レベル設定の枠組みとして主に受け入れられている CEFR の基本理念には、Can-Do リストに象徴されるような行動中心主義的な考え方のほか、複言語複文化的な立ち位置のもとで、生涯学習として言葉を学んでいく自律的学習の価値観があり、欧州においては、能力発達や学習の指針を示す CEFR と合わせて、「できるようになったこと」を自己評価とともにパフォーマンスとして証拠で残す「ヨーロッパ言語ポートフォリオ（European Language Portfolio、ELP）」が学習支援の道具として用いられている。また、機能中心で記述された汎言語的な CEFR を補完する動きとして、English Profile Programme（EPP）など、各言語の言語面での発達のプロファイルを記述し、学習者コーパスなどのデータに基づいてレベル間の特徴的な差異を「基準特性（criterial features）」として分析する動きも進んでいる。

２．研究の目的

本研究では、学習者のライティング及びスピーキングのパフォーマンスデータをポートフォリオ的に蓄積することで学習者コーパスを作成し、CEFR に紐づけして評価を行うことで、評価データ付きのコーパスを構築することを目的とする。また、学習者が実際にできることをテキストから分析して、証拠となる基準特性に基づいた評価観点を記述することで、CEFR に準拠した産出評価のためのルーブリックの開発・検討を行うことを目的とする。

さらには、そうしたルーブリックの記述を反映した Can-Do リストを作成し、CEFR で次のレベルに到達するための具体的かつ段階的なプロセスを記述して示し、ポートフォリオと関連づけることによって、学習者の自らの能力発達に関する機能面・言語面の両面における内省（reflection）を促進し、自律学習を支援するための道具を開発することも目的とする。こうした学習者コーパス構築を通して、最終的には、到達過程における中間言語的な部分的能力（partial competence）発達を、未達成の否定的な証拠ではなく、肯定的な証拠として言語ポートフォリオと連動させて具体的に示すことで学習者の「できる感」を高め、証拠の可視化より教師の内省を助け、観察力・評価力向上に活用することを狙いとする。

３．研究の方法

本研究の推進にあたっては、申請者及び分担者の勤務する東海大学国際教育センターが統括する英語統一カリキュラムと連動させて、1 年次から 2 年次にかけての習熟度別のクラスにおいて、1）CEFR レベルに準拠した到達目標設定に基づく Can-Do リストの形式での自己評価、2）統一評価ルーブリックを用いたライティング及びスピーキング能力評価を実施した。また、3）外部評価者による CEFR 評価を行い、CEFR データ付き学習者コーパスの構築を行った。

東海大学国際教育センター（旧外国語教育センター）では、2010 年度以来 CEFR に準拠した英語統一カリキュラムをすでに実施しており、Can-Do 形式による到達目標やスピーキングとライティングにおける統一評価ルーブリックを導入してきている。しかしながら、各レベルにおける到達目標が能力に即しているか、CEFR によるレベル評価と統一ルーブリックによる評価が一致しているかについては検証がなされていなかった。そこで 2018 年度からの新カリキュラムへの移行を踏まえて、これらの既存の Can-Do 自己評価チェックリストやスピーキング及びライティング評価ルーブリックと CEFR レベルとの関連づけを行うことで、CEFR により直接的に準拠した Can-Do リスト記述や評価ルーブリックの開発・検討を行った。

具体的には、必修英語クラスでの中間及び学期末試験における学習者の作文データ及びインタビュー音声データを収集し、幅広い習熟度別クラスにおけるライティング及びスピーキング学習者コーパスの構築を試みた。ライティングにおいては、中間評価ではプロセス・ライティングによる書き直しを含めた評価を行い、期末評価では時間制限の中でのライティングによる評価を行っているため、それぞれの実施形態によるパフォーマンスの差についても分析を行った。スピーキングにおいては、ペアでのインタビュー形式によるパフォーマンス評価を行っており、主に期末試験データの分析を行った。

これらの作文及び音声データと合わせて、ライティング及びスピーキング統一評価ルーブリ

ックに基づいた授業内評価の観点別評価データも収集・分析を行った。ライティング評価においては、内容（Content）、構成（Organization）、文法（Grammar）、語彙（Vocabulary）、体裁（Mechanics, etc.）の観点別評価をもとに統一評価を行っている。スピーキング評価においては、発音（Pronunciation）、語彙（Vocabulary）、構造（Structure）、流暢さ（Fluency）、会話方略（Conv. Strategy）の観点別評価を行っており、ペア形式であることから、会話方略についても評価を行っていることが特徴であり、各下位観点についても分析を行った。

また、こうした内部評価に加えて、CEFR 評価に習熟した外部評価者 2 名により、同一データに対して CEFR 評価を行い、各作文や音声データのレベルを決定し、内部評価と外部評価の相互の関連性を分析した。収集した作文・音声データは、デジタルデータへの書き起こしを行い、CEFR レベルや習熟クラス情報などのメタ的な情報のほか、POS Tagger を用いて文法（品詞）タグも付加し、CEFR-J 語彙リストを用いたタグも加え、CEFR 評価との関連を分析した。

４．研究成果

本研究の結果、中間テストプロセスライティング 377 名及び期末テストライティング 313 名分のデータに基づくライティング学習者コーパス並びに、期末スピーキングインタビューテスト 431 名分のデータに基づくスピーキング学習者コーパスの構築を行った[注]。各コーパスにおけるデータの一部を用いた統一ルーブリック観点別評価（内部評価）と CEFR レベル評価（外部評価）との関連を以下のグラフに示す。

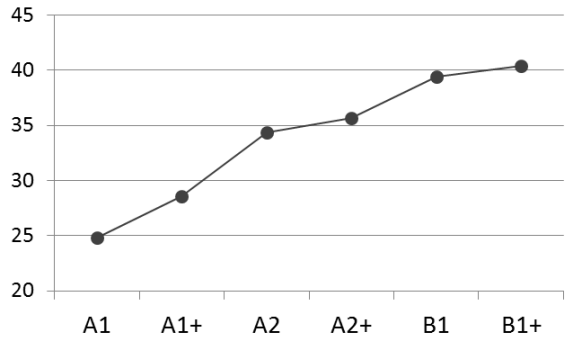

図 1 ライティング統一ルーブリック評価スコア（全体）と CEFR レベル

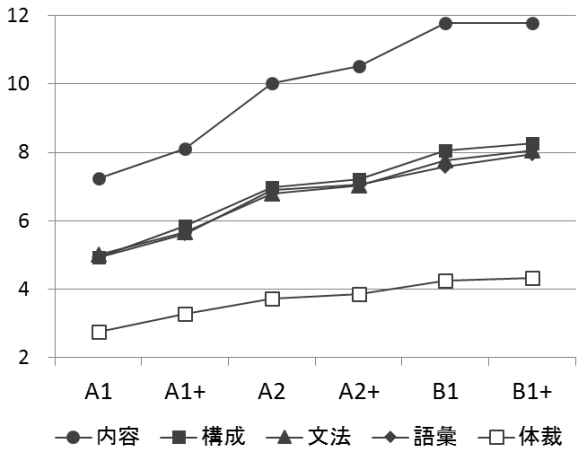

図 2 ライティング統一ルーブリック評価スコア（観点別）と CEFR レベル

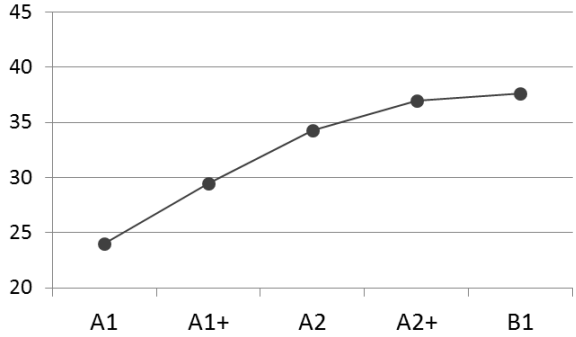

図 3 スピーキング統一ルーブリック評価スコア（全体）と CEFR レベル

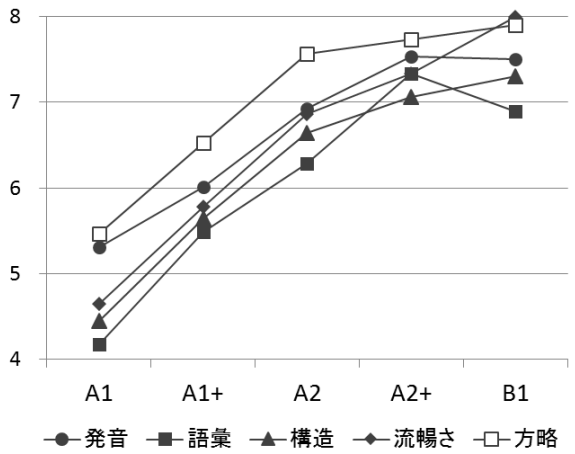

図 4 スピーキング統一ルーブリック評価スコア（観点別）と CEFR レベル

各統一ルーブリック評価スコアは、CEFR レベルと直線的な関係を示しており、統一ルーブリックの各バンドにおける CEFR の該当レベルが明らかとなった。全体スコアと観点別スコアは概ね同様の傾向を示していたが、例えば、スピーキングの方略使用は A2 までに上位のバンドに上がっているが、構造は B1 までに緩やかに上がるといった特徴も見られた。

統一ルーブリックを用いることで、レベル間で一貫した到達指標を用いることができる一方で、低いレベルの学習者にとっては、相対的な低いスコアとなることから達成感を感じづらいといった欠点があった。上記の分析に基づいて各習熟度クラスで設定された CEFR 到達目標レベルとの関連を明示的に示すことによって、教員にとっても指導上の目標が明確になり、学習者へのフィードバックをしやすくなった。

また、コーパス分析からは各レベルの語彙や文法上の基準特性についても一定の指標が得られ、統一ルーブリック評価スコアの解釈の参考となる情報が得られた。例えば、A1 から A2 の作文データでは平均文長が 8 語程度でほぼ変わらないのに対して、A2+から上昇し、B1 では 10 語を越えており、English Profile における基準特性の平均発話長分析結果と同様の傾向が示された。ただし、観点別評価では A1 から A2 では文法面で向上が見られるなど、評価データと合わせることで、各レベルの学習者の特徴が多角的に示された。

学習者コーパスデータとは別途、全必修英語クラスを対象として、Can-Do リスト形式による到達目標自己評価データについても収集を行った（リーディング＆ライティング 1・2：742 名／820 名、リスニング＆スピーキング 1・2：785 名／666 名）。各項目は 1 年次、2 年次の初級、中級、上級における到達目標の記述文を踏まえ、下記のような 5 段階の尺度で尋ねた。

「英語で文章を読んで評価して、修正をすることができる。」[W10]
5. 自分やｸﾗｽﾒｰﾄが書いた複雑でまとまった文章を批判的に評価して十分な修正ができる。
4. 自分やｸﾗｽﾒｰﾄが書いた短い文章を客観的に評価してほぼ適切な修正ができる。
3. 自分やｸﾗｽﾒｰﾄが書いた文章を批判的に読んで必要な修正ができる。
2. 自分やｸﾗｽﾒｰﾄが書いた簡単なパラグラフを批判的に読んで基本的な修正ができる。
1. 上記の 2 もまだ難しい。

統一ルーブリック評価から推定される CEFR レベルとの関連の分析を行った結果、ライティング自己評価（全 10 項目）においては、PreA1 から B1 にかけてどの項目でも上昇を示していた（項目間平均 PreA1:2.21、A1:2.46、A1+:2.64、A2:2.71、B1:2.98）。ただし、句読点等の体裁に関する項目[W8]では高い値（平均 2.92）であったのに対して、上記の修正に関する項目では低い値（平均 2.51）を示すなど、到達目標間で差異が見られ、各レベルの記述文の見直しへの示唆が得ることができた。スピーキング自己評価（全 8 項目）でも同様にレベル間での上昇傾向が見られたものの（項目間平均 PreA1:2.74、A1:2.84、A1+:2.88、A2:3.06、B1:3.23）、ライティングと比較するとレベル間の差が低い傾向にあった。また、低いレベルにおいても全体的に自信の程度が高い傾向にあり、記述文のレベル調整の参考となるデータが得られた。

本科研による学習者コーパス構築で、2020 年度に予定されている改組に向けて、より CEFR に準拠したカリキュラム改善・開発を行っていくための基盤を得ることができた。本科研ではさらなる継続的なコーパス収集及びポートフォリオ評価促進のためのポータルシステム開発を行う予定であったが、学内環境が整わなかったことから、開発は見送りとなった。学内の予算等を確保しながら、本研究の知見を活かして、今後のカリキュラム開発において、ポートフォリオシステムの構築を計画していくと同時にさらなる分析結果の共有を行っていきたい。

注）学習者コーパスデータには、本科研申請の基盤として獲得を行った学内競争的資金に基づくデータも含まれる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 1 件）

① Hiroko Usami(2016)「Vocabulary Used in Paired Conversation: Across CEFR Levels on the English Vocabulary Profile」東海大学国際教育センター所報（英語教育部門・国際言語教育部門）第 36 号（pp.39-48）査読無

〔学会発表〕（計 3 件）

① 長沼君主(2018)「発話・作文学習者コーパスに基づいた CEFR 準拠統一カリキュラム到達指標及び評価ルーブリック改善に向けた試み」第 56 回大学英語教育学会国際研究大会

② Naoyuki Naganuma(2016)「Building and Utilizing a Learner Corpus with the CEFR」The 14th Asia TEFL International Conference

③ 長沼君主・宇佐美裕子(2015)「東海大学発話・作文学習者コーパス構築と CEFR 準拠到達目標及び指標改善の試み」第 41 回英語コーパス学会

６．研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：宇佐美 裕子

ローマ字氏名：USAMI Hiroko

所属研究機関名：東海大学

部局名：国際教育センター

職名：准教授

研究者番号（8 桁）：20734825

研究分担者氏名：古賀 功

ローマ字氏名：KOGA Tsutomu

所属研究機関名：東海大学

部局名：国際教育センター

職名：准教授

研究者番号（8 桁）：90528754

研究分担者氏名：藤田 玲子

ローマ字氏名：FUJITA Reiko

所属研究機関名：東海大学

部局名：国際教育センター

職名：教授

研究者番号（8 桁）：90366930

(2)研究協力者

特になし

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。